理論生物学における間接互恵性の議論に基づくと、人々が持つ、評判を気にする心理傾向はコミュニティ内の他者に対する利他行動を生起させると予測される。この仮説を検証するために、最小条件集団を用いて、抽象的な目の絵が存在する状況における内集団成員と外集団成員に対する利他行動を測定した。独裁者ゲームの分配者となった参加者は、受け手の所属集団を知らされた上で分配金額を決定したが、同時に、受け手は分配者がどちらの集団に所属しているかを知らないということも教示された。実験の結果、目の絵がコンピュータのデスクトップ画面に表示されている場合にのみ内集団ひいきが生じたが、目の絵が表示されていない場合は内集団の受け手と外集団の受け手に対する分配金額に差は見られなかった。これらの結果は、コンピュータ画面上に表示された目の絵が内集団成員からの監視の手がかりとして機能していたことを示している。